



## 遊動民(ノマッド)——アフリカの原野に生きる

田中二郎他編

本書は、日本における40年にわたるブッシュマン研究および遊牧民研究の集大成といえよう。736ページ、全28章にもなる論文集である。寄稿者は、この分野で活躍する研究者たちであり、1941年生まれの実験者から77年生まれの新人まで、つまり本書のいうところの「第一世代」から「第三世代」まで勢揃いしている。

構成は、大きく二部に分かれており、第I篇は「カラハリ砂漠の狩猟採集民ブッシュマン」として、ボツワナにおけるブッシュマン研究を中心に12編の論文が紹介されている。第II篇は「乾燥帯アフリカの牧畜民」と題され、主として東アフリカの牧畜社会を対象とした16編の論文が掲載されている。

その量だけでも圧倒されるが、各研究者の論文は、それぞれ個性あふれる品揃えとなっている。濃密なフィールド・ワークの成果もあれば、ライフ・ヒストリーあり、言語学あり、構造主義を超えた次元で人類学を見つめ直そうという試みまで、内容も多彩である。

その分統一性はあるとはいえないが、同時にそれは、各研究者それぞれが独自の視点で研究に取り組んでいることを示しており、ブッシュマン研究および牧畜民研究の裾野の広がりを感じさせる。興味のおもむくままにページを繰っても楽しいが、順番に読み進めていくことで目の前に繰り広げられる研究の多様さ奥深さに感嘆するのもまた楽しい本である。

なお、本書への序(田中二郎)、各篇への序(第I篇：菅原和孝、第II篇：太田至)は、これまでの日本におけるブッシュマン研究史および牧畜社会研究史を概観したものであり、これらの研究における主要な論点がわかりやすく提示されている。

この二つの分野だけでなく、アフリカ研究そして人類学研究における一つの参照軸としての役割を果たせる本である。

(児玉由佳)



## アフリカ農民の経済——組織原理の地域比較

杉村和彦著

本書は、コンゴ民主共和国(現ザイール)のキサンガニ周辺地域の熱帯雨林下で焼畑に依存して生きるクム人社会の事例を紹介しつつ、アフリカ農民経済の組織原理という視点からアフリカ小農論争を考察している。

本書は全体が11章で構成されており、第3章から第9章にかけてキサンガニ周辺地域のクム社会の慣行が紹介されている。これらのうち最も代表的な事例が、クム社会の「共食」慣行である。1日2回の「共食」慣行はクム人の生活の根幹となっており、「共食」を理解することはすなわちクム社会全体を理解することにつながると言っても過言ではない。本書では、クム社会の「共食」と「分与の経済」との関連性や、「共食」の分析によって導き出される「消費の共同体」という概念、それに支えられた「情の経済」という社会構造も明らかにしている。また「共食」慣行以外には、商品経済と焼畑農村間の関係の分析や、焼畑農耕における「混作」という技術的特質の検討等がなされている。

こうした事例研究の具体的記述も非常に興味深い。それに続く第10章、第11章にも惹きつけられる。ここでは前章までに述べられている事例を元に、アフリカ小農論争の再検討が行われている。チャーノフらの小農モデルとクム社会の比較や、「消費の共同性」という視点からアフリカ農村経済の動態の特性との連関といった考察が行われているほか、アフリカ農民経済研究の文明史的意味と今後の可能性を問いただしている。

500ページ近いこの本を読むことに躊躇する方も多いかも知れない。だが本書は、クム社会の事例研究だけで完結しているのではなく、それを理論と照らし合わせて再検討しているため、より深く事例を理解することができる。ぜひ一読することをお勧めする。

(原島 梓)



### コーヒーと南北問題——「キリマンジャロ」のフードシステム

辻村英之著

本書では、「キリマンジャロ」の名前で知られるタンザニア北部産のコーヒー豆の価格形成が詳細に分析されている。分析の枠組みは、農産物の生産から消費までの商品連鎖を重視するフードシステム論に基づき、生産者、輸出業者、卸売業者、小売業者の各段階における価格形成システムを検討している。タンザニアのコーヒー豆流通は1990年代に自由化され、多国籍企業の参入によって価格形成システムに大きな変化が生じたという。著者は、途上国から先進国にまたがるフードシステムの中では、途上国の生産者がもっとも不利になるという問題意識を持ち、それゆえに分析の視点を「『小農にとっての』公正性という評価基準」(p.9)に置いている。

各流通段階での分析を通じて、先進国での小売価格と比較してタンザニアでの生産者価格がきわめて低いことが明らかにされる。その原因として、「支配的な取引量」を持つ多国籍企業が買付価格および競売価格を談合によって低くしていること、輸出価格がニューヨークの先物取引価格と連動しており、生産量の少ないキリマンジャロの需給状態がほとんど価格に反映されないこと、農民からの買付け時には豆の品質が正確には分からないため買付価格が割引されること、などが示される。買付価格を上昇させる方法として、フェアトレードの拡大と協同組合による買付けの強化が提案されている。

数度にわたるタンザニアでの現地調査にもとづいた供給サイドの分析はひじょうに綿密であり、キリマンジャロの価格形成システムの一面を明らかにしている。一方、価格決定力を持つとしている需要サイドのインセンティブ構造の検討が不十分に感じられる。例えば、キリマンジャロは小売段階で高いプレミアムがつくにもかかわらず、多国籍企業が品質向上を図らないのはなぜであろうか。価格形成システムの解明には企業の分析も不可欠と思われる。また、著者の評価基準となる「公正性」の定義に、もう少し説明がほしいと感じた。

(福西隆弘)



### アフリカの宗教

A・M・ルギラ著 (嶋田義仁訳)

本書はファクツ・オン・ファイル社版「世界の宗教シリーズ」全13巻のうちの1巻として邦訳されたものであり、著者はウガンダ出身の研究者である。序文によれば、学生や一般読者向けに、今日の世界における「宗教が実践されている地域や、起源と歴史、その中心的な信条や重要な儀式、世界の文明に果たした貢献」などを平易に解説することが目指されている。この巻について言えば、特定の宗教ではなく、アフリカ大陸とそこに住む人々の信仰のあらましが多くの具体的事例とともに論じられている。

全体は八つの章からなり、各章とも小見出しを付した細かい節に分けられ、いずれもコンパクトに記述されている。第1章「アフリカとその人々」で、歴史を含めた背景的な解説が加えられたのち、つづく六つの章はそれぞれ「時の始まり：口頭伝承」、「至高存在」、「精霊の世界」、「アフリカの宗教における儀式と儀礼」、「聖なる空間と場」、「神秘力」というタイトルで、信仰の体系的理解には欠かせない要素が順次紹介されている。最後の第8章「現代世界とアフリカ宗教」では、アフリカの信仰やその慣行が世界的に認知されるに至る経緯、今日におけるその影響力といった内容を、やや強い語り口で展開したのち、その未来について短く語り締め括っている。

「アフリカの民族諸宗教」と題した一表で、「すたれた宗教」と「生きている宗教」とが多数の民族名を付して紹介されている。これをみると、著者が提示する「アフリカの宗教」というものが、民衆のなかから自然発生的に生まれたさまざまな信仰を指していることがよく分かる。それらが人々の生活のなかではぐくまれ、民族ごとにさまざまな展開を経て、あるものは今日に受け継がれたということであろう。ただし、それらの括り方については、「訳者あとがき」にも異論が開陳されており、読者として考えさせられるところもある。入門書としての性格を意識して手にするならば、訳者とその協力者により挿入された多数の写真とともに楽しめる一書となろう。

(望月克哉)



## マラウィを知るための45章

栗田和明著

「ロンドンやパリの案内ならばまだしも、名も知れぬマラウィなどの出版は困難です」。出版社の人のこんな発言が、本書のあとがきに紹介されている。実際「アフリカ」の文字が入っている本を、商業ベースで出版させるのは簡単ではない。ところがこの本は、よりマイナーな「マラウィ」の文字を堂々とタイトルに出している。著者と出版社のこの勇気ある行動に、まず敬服する。

著者の栗田氏は、もともとタンザニアを主なフィールドとしていた。しかし1990年からはマラウィに何度も入って調査を進め、2000年から2001年にかけてはマラウィ大学に所属して長期滞在も経験している。著者が最初にマラウィに入った90年といえば、独立以来のバンダ大統領支配がまだ続いていた時代である。この本の一つの特徴は、そんなバンダ時代と現代との比較を随所にちりばめ、この国が経験している大きな変化を読者が実感できるようにしていることだろう。

このような広い意味での「比較」という視点は、本書全体に貫かれているテーマであるようだ。著者はマラウィの具体的な数字や事象を紹介しながら、それを日本と比較したり、近隣諸国と比較したり、あるいは歴史的に比較したりしながら、読者が具体的なイメージを描きやすいように工夫している。

さらに著者の一貫した「生活者」としての視点も、遠い国マラウィを読者に伝えるのに効果的だ。たとえばマラウィ湖に生息する魚の種類を学名で紹介してその特徴を述べながら、いつの間にか話はその魚の料理方法やマラウィ湖での釣りの成果などに移っていたりする。あるいは近隣諸国との経済関係や人口移動の変遷を概観しながら、実際にタンザニアからマラウィに来て働いている著者の知り合いの経歴が紹介されたりする。このようなマクロの「概論」とマイクロの「生活者の視点」のコンビネーションは、この国に長く関わっている著者ならではの妙技といえる。

マラウィへの案内書としてだけでなく、アフリカ一般の入門書としても幅広く活用できる一冊である。

(高根 務)

東京 明石書店 2004年 295p.



## ブッシュマンとして生きる ——原野で考えることばと身体

菅原和孝著

この著者の作品『もし、みんながブッシュマンだったら』（福音館書店 1999年）を読んだとき、私は久しく忘れていた恍惚とした感覚を覚えた。本を読みながら、のめり込むような気分である。その感動は、どちらかといえば、アフリカ研究者という自分の職業から離れた個人的なものだったように思う。

本書の出版を知ったとき、私は大きな期待を持ってそれを買い求め、その期待は裏切られなかった。ただ、読後感は前回と少々違った。本書を私は、より自分の研究とのつながりを意識しながら読んだ。現代アフリカの政治や紛争に関心を持つ者として、本書から多くを学ぶことができた。

周知のように、著者はボツワナのブッシュマン(グイ／ガナ)社会をフィールドとして、人類学的アプローチから、会話、身体、セクシュアリティといったテーマに関する重厚な研究成果を積み重ねてきた。本書は新書形式を取ってはいるものの、著者のこれまでの蓄積、さらなる発見が凝縮して書き込まれている。読みやすく工夫されているが、記述の水準は高い。

個人的には、バントゥ系農牧民(テベ)や国家との関わりからグイ／ガナ社会の特質を描く第6章を最も興味深く読んだ。ここでは、再定住計画を拒むために持ち出される、祖先が暮らした土地を離れないというロジックが、実は西欧的なイデオロギーの影響を強く受けたものであることが説得的に主張される。この発見は、今日世界各地で高揚する先住民運動の意味を考えるために重要な視点を提供するだろう。

加えて、国家を前にした彼らの態度を形容する「オポチュニズム」という言葉には大いに共感を覚えた。本書では、それが彼らの問題点というよりも、学ぶべき「ブッシュマン・センス」の一つとして読者に提示される。その主張は決してナイーブなロマン主義ではなく、著者の身体を経由した力強い説得力に満ちている。良質の人類学の素晴らしさを堪能できる本である。

(武内進一)

東京 中央公論新社(中公新書)2004年 302+ivp.



呪医の末裔——東アフリカオデニョ族の二十世紀

松田素二著

「今から四半世紀近く昔」というから1970年代の終わり、初めてのケニア滞在中に、著者は行きつけのバーで同世代のケニア人青年と親交を結ぶ。彼に導かれる形で著者は、その後20年以上にわたって、彼とその一族——19世紀末に西ケニアに移り住んだ開祖のオデニョ氏に始まる4世代80名あまりの人々——と出会い、一人一人のライフ・ストーリーを聞き取ってきたという。それらを再構成したのが本書である。

老オデニョに始まって、時代を下りながら主に9人の生活史が描かれるのだが、家計の運営や仕事選びなど一人一人のエピソードを語るつど、植民地化、構造調整、グローバル化の進展といったそれに関連する大状況を提示するという、いわば入れ子細工の構成を本書は採用している。「均質化と標準化が急速に進む現代世界に」生きる私たちにとって、同じように大状況におかれ、それを生き抜いてきたケニアの人々こそが、同時代を生きる知恵、すなわち「生の技法」を学ばせてくれる——本書に託された著者の確信はおそらくこう要約することができる。入れ子細工の構成は、個人の生活世界とそれを取り巻く「巨大な力」のせめぎ合いへと読者の注意を常に喚起し、本書の主張を清明に伝える効果的な道具立てとなっている。

一方、入れ子細工はまた別の効果も持った。植民地期の就職問題、互助システムの変容など、具体的で多彩な一人一人の経験。それらを取り巻くものとして著者がそのつど説明を施す植民地支配、両世界大戦、ケニアの独立、経済危機、政治的民主化などの大状況。両者が対比の中で語られることで、通常は分離しがちな微視と巨視の世界が本書では幸福な融合を果たしているのである。読了して「生の技法」に目を開かれる読者はもちろん大勢だろう。しかし、それを遙かに上回る数の読者が、本書の豊かな内容に単純に魅了され、楽しんでページを繰るのではないだろうか。評者もその一人であった。アフリカニストの枠を越えて多くのひとに心からお薦めしたい作品である。

(津田みわ)



植民地経験のゆくえ——アリス・グリーン・のサロンと世紀転換期の英大帝国

井野瀬久美恵著

本書は、二人の女性が残した手紙と著作の綿密な分析を通して、彼女たちが生きた、19世紀末から20世紀にかけての世紀転換期の英大帝国という空間を論じたものである。「二人の女性」とは、19世紀末に単身西アフリカを旅した「レディ・トラヴェラー」メアリ・キングズリと、「ロンドン有数のサロンの女主人」アリス・グリーンである。彼女らが歴史研究においてそれほど知名度が高くないことは著者が指摘するとおり(p.432)だが、人文・社会科学系の学術誌 *African Affairs* が、そもそも、アリスがメアリを追悼する目的で1901年に設立したアフリカ協会 (African Society) の季刊誌として創刊されたものであると知れば、アフリカ研究者にとって一定の接点となろう。

第1章の問題提起に続き、世紀転換期のロンドンのサロンの様子(第2章)、メアリの西アフリカへの旅とその突然の死(第3章)、アリスのサロンを中核としたアフリカ協会の設立(第4章)、メアリの最期の様子(メアリは南アフリカ戦争のボーア人捕虜の介護中に死亡)を知るための、アリスのセントヘレナ(当時ボーア人捕虜収容所があった)への旅(第5章)、そこで胚胎された「南アフリカはアイルランドと同じである」という確信から、アングロ・アイリッシュであるアリスがみずから「アイルランド人」と認識しアイルランド史の書き換えを試みていく過程(第6章)が順次丹念に描かれる。結びでは「コモンウェルス」をめぐる問題系が展望される。

植民地帝国という空間の問題、アイデンティティとシティズンシップ、旧来帝国史における女性の位置づけの訂正、といった理論的な論点への言及も豊富で、示唆に富む。また、それにもまして印象的なのは、ダブリンの図書館に籠もってのアリス・グリーン文書の丹念な読み込みという地道な作業から、この壮大な構想の本書が編み出されたという点である。歴史学のメソッドの強さを見せつけられた思いがする。

(佐藤 章)